淡海環境保全財団広報誌

あすの淡海

自然と人との共生をめざして

VOL. 52
2026 冬号

フューチャー・デザインが拓く2050年の希望の滋賀

フューチャー・デザインが拓く2050年の希望の滋賀
～未来を描き、今を変える～

今年の夏（６月から８月）の日本の平均気温偏差は＋2.36℃で、３年連続1898年以降の統計開始以降最も高い値となり、夏の猛暑日などの記録も更新しました。また、全国的に局地的な大雨も多く発生しました。

現在、世界では地球温暖化について様々な見解がありますが、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）によると、人間活動が主に温室効果ガスの排出を通して地球温暖化を引き起こしてきたことには疑う余地がないと言われています。

地球環境は私たちの生活のすべての基盤であり、温暖化対策は人類みんなで考えて取り組んでいかなければならない課題です。今や誰もが危機的な状況であると思っているにもかかわらず、「行動が広がらない」のはなぜでしょう。

日本では、特に温暖化対策に対して「がまんを伴う負担感」や「大きすぎる課題への無力感」を感じてしまう人が多いのが現状です。また、自分の行動がどんな成果につながるのかが見えにくいのも一因ではないでしょうか。

行動を生むのは、楽しさと希望

2023年　企業へ脱炭素の取組提案を行った大学生の皆さん

自ら行動し、何かを変えられた時の達成感や、仲間と共有した時間や喜びの経験は、その後の人生においても「自分から働きかけ、社会を変えていこうとする力」につながっていくはずです。

そのような思いから当財団では、2021年から持続可能な社会の実現に向けて、大学生が主体となり、企業や大学を巻き込みながら CO_2 ネットゼロを達成するための行動について「学び」、多様な人と「つながり」、県内へ「ひろげる」ことを目標に、CO_2削減につながる多様な取り組みを進めてきました。具体的には、参加者の大学における給水機の設置やマイボトル持参の推進、サステナブルファション、企業への提案など徐々に取り組みを広げてきました。

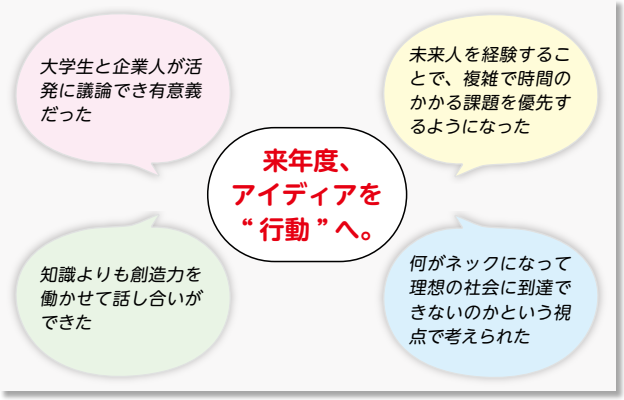
今年度は、大阪大学の原圭史郎先生を講師にお迎えし、将来世代の視点に立ち、意思決定を行う「未来人ワーク」、フューチャー・デザインの手法を学びました。持続可能な社会の実現に必要な施策について、大学生と社会人が混在したチームで３回にわたり熱心に議論を重ねています。世代や立場、さらには時空を超えて、社会のあり方を真剣に見つめ直す貴重な機会となっています。

参加者一人ひとりが、環境問題を優先順位の高い課題と捉え、より良い行動を選択していくことは、必ず大きな変化につながります。将来世代への責任感を胸に行動できる人材が育ち、今後活躍されることを期待しています。

これからの取り組み

次回はいよいよ最終回。「自分たちに何ができるのか」「どこを巻き込み、どのように実現していくのか」を深く掘り下げ、アクションプランへ落とし込む時間となります。

今年度のワークショップを通じて「未来人」の視点を学び、現在の延長線ではなく、世代を超えて持続可能な未来を真剣に思い描くプロセスに挑戦しました。来年度以降、ここで生まれたアイディアを具体的な取り組みへと発展させるため、企業の皆さまのご協力もいただきながら、財団として継続的にサポートしていきます。



第2回ワークショップ参加者アンケートより

フューチャー・デザインとは?

将来世代に持続可能な社会を引き継ぐための仕組みのデザインと実践のことです。

人は元来、近視眼的で未来について楽観的になりやすく、今ある課題への対処も現在の制約にとらわれてしまいがちです。そこでフューチャー・デザインの手法では、未だ見ぬ将来世代の視点に立ち、持続可能な社会のあり様を描き、取るべき対策を検討します。

目の前の利益や便利さにとらわれず、未来から今を見つめ直す。その発想が、社会の構造を変える第一歩となります。

大阪大学フューチャー・デザイン革新拠点のホームページには、フューチャー・デザインの様々な実践実例が紹介されています。

表紙写真「フューチャー・デザイン」のワークショップの様子

この人に聞く

アストラゼネカ株式会社
オペレーション本部長
濱田（はまだ）　琴美（ことみ）さん

私たちの暮らしや経済活動は、豊かな環境の基盤の上に成り立っています。

こうしたことから、現在多くの企業ではサステナビリティの取り組みが最優先課題となっています。

国内最大級の製薬企業である、アストラゼネカ㈱は、人々の健康を実現するには社会や地球の健康が不可欠という観点から、気候変動対策や自然環境保全等に積極的に取り組まれています。

中でも、米原工場は、日本国内唯一の生産拠点として重要な役割を果たされており、人と環境に真剣に向き合う工場として気候変動対策を使命にCO_2削減につながる取り組みを次々と導入されています。

今回はアストラゼネカ㈱オペレーション本部長の濱田琴美さんにお話しを聞きました。

－オペレーション本部長の主な役割と、日々どのような視点を大切にされているかお聞かせください。

濱田さん　国内唯一の生産拠点の責任者として、生産部門と品質管理部門、サプライチェーンマネジメントを統括しています。日々、厳格な品質保証体制のもと、医薬品の安全と品質と安定供給を図りつつ、常にサステナビリティを意識しています。

－気候変動がもたらすリスクやサステナビリティを重要課題と位置付けられている背景を教えてください。

濱田さん　当社は、イギリスに本社がある製薬会社であり、温暖化や気候変動を今や「気候危機」というイメージで捉えています。世界経済フォーラムの報告では、2050年までに気候変動関連死が1,450万人に上ると報告されています。我々は気候変動によって人々の健康が脅かされていることに強い危機感を持ち、全社を挙げてサステナビリティに真剣に取り組んでいます。

－脱炭素の具体的な取り組み事例や課題は何ですか。

濱田さん　2020年に「アンビション・ゼロカーボン」を宣言しました。具体的には、2026年までに自社内の温室効果ガス排出量を98%削減（2015年比）、2030年までにバリューチェーン全体の排出量を50%削減（2019年比）、2045年までに全体を90%削減するという高い目標を掲げました。これにより、工場でRE100（再生エネルギー100%）を達成するため、ソーラーパネルを設置して電気使用量の20%を自家発電で賄い、残りは再生可能エネルギーを購入することで2022年8月に工場のゼロカーボンを達成しました。

また、PTP（錠剤の包装材）のリサイクルや通勤バスのＥＶ化も行いました。

課題としては、医薬品を製造している工場では薬の温度管理や清浄度を保つことが必要であり、比較的多くのエネルギーを使うため、設備の環境負荷を今後さらに低減できるように、技術面でも運用面でも、最適化し続けていかなければならないことです。

今はできないからと諦めずに、新しいアイディアを探し続けることが大事だと思います。エンジニアリング部署の担当が業界の展示会等、新しい技術を学べるところに積極的に行き、常にできることがないか検討しています。

－サステナビリティの取り組みはどのように進められているのですか。

濱田さん　サステナビリティ活動は会社が率先してやっていく「トップダウン」と、社員全員が自らボランティア活動等に参加する「ボトムアップ」の両方必要だと思っています。2022年に25人の社員が、自分たちが勉強しそれを広めるという「サステナビリティチャンピオン」という活動を始めました。食堂での廃棄食材を減らすための「小盛り」や社内で家庭から出る資源の回収ステーションを提案するなど、地に足の着いたアイディアを出し、実践する「ボトムアップ」の活動を積極的に行っています。

－どのようにして社員のモチベーションアップや行動変容を促されているのですか。

濱田さん　社員のがんばりがわかるよう、生産量や電気使用量などを数字で見える化することが大事だと思います。またボランティア休暇制度を設け、社員の過半数が湖岸清掃など環境保全活動に参加しています。

当社の取り組みを社外に積極的に発信することや、地域の活動やイベントに参加することで、地域の方にお声がけいただけたり、お子さんから「パパ、ママの会社はすごいんだね」と言われたりすることが社員のやる気につながっているように思います。

－人材育成や組織運営についての考えをお聞かせください。

濱田さん　テクノロジーが進歩し、自動化やAIが発達しても、品質管理や安全の担保は最終的には人間の仕事であり、人材が一番大切だと感じています。

特に組織で仕事をするには考え方の多様性が非常に重要で、「Inclusion＆Diversity」、違いのある人と協調して働こうという考え方を育てたいと思っています。新しいアイディアを提案し、よりよいものにして具現化するためにはよいチームワークが必要です。長期的に伸びしろのある組織にしていくために、多様性を尊重してシナジーを出しながら、みんなで考えてよりよい仕事をする風土を作っていきたいと思っています。

－今後のサステナビリティの取り組みをお聞かせください。

濱田さん　脱炭素の次のチャレンジとしてバリューチェーン全体（スコープ3）の取り組みを強化したいと考えています。これは1社だけでは難しく、サプライヤーやベンダーの協力が必要です。業界全体や産業を超えた取り組みが重要です。現在、政府のグリーントランスフォーメーション関連の会合にも参加させていただいています。

また、8月には米原市と「伊吹山植生復元プロジェクト」への連携協定を締結し、動物・植物・人の最適なバランスの保持を目指して、自然保護団体や地域の皆さん、企業の皆さんと協力しながらボランティア活動を進めたいと考えています。

伊吹山清掃登山 休憩時の濱田さん

淡海ヨシ紀行

～淡海の原風景を訪ねて

第6回　下物（草津市）

「下物」と書いて「おろしも」と呼ぶこの地域には、かつて県下有数のヨシ群落が広がっていたようです。『古地図に描かれた草津』（草津市発行）に明治６年の近江国栗太郡下物村の地券取調総絵図が掲載されています。現在の烏丸半島にあたる場所に三角形の二辺のような形の砂嘴が突き出しており、その先端は烏丸崎と呼ばれていました。暴れ川であった野洲川はその旧河道の痕跡から、かつては烏丸半島付近を流れていたことがわかっています。烏丸半島は野洲川の上流から運ばれた土砂が堆積してできたもので、そこに先駆植物のヨシが大群落を形成していたようです。先の下物村の地券取調総絵図を見ると、湖上に突き出た砂嘴に塗り分けられた土地利用区分が灰色の「葭」になっていることからも、そのことがわかります。

烏丸半島から少し内陸部には、多くの古文書や美術工芸品を残すことから「近江の正倉院」とも呼ばれる芦浦観音寺があります。また、下物町に隣接する志那町の橘堂には、江戸時代にこの地で生まれた心学者、慈音尼兼葭の墓碑が残されています。芦浦観音寺の「芦」と慈音尼兼葭の「葭」。いずれもこの地とヨシとの深いかかわりを表しています。

下物はヨシの一大生産地でもあり、『近江国栗太郡下物村誌』には、下物村で年間おおよそ2,000束のヨシが生産されていた記録が残り、また『草津市史　第二巻』（草津市史編さん委員会編）には烏丸崎が「御公儀小物成地」として天領であり、代官に葭年貢を小物成として納めていた記録が残ります。

明治以降もヨシは盛んに利用され、『下物町誌』（発行：下物町町内会）には、箱型のヨシ下駄を履いてヨシの刈り取りを行ったことや、刈ったヨシを炊事用の燃料、ムシロの下敷、簾などに利用していた様子が描かれています。

こうしたヨシ利用の伝統を今に引き継ぎ、健全なヨシ原を維持していくため、草津ヨシ松明まつり実行委員会はボランティアによるヨシ刈りを実施し、刈り取ったヨシを夏に開催するヨシ松明まつりの材料として活用しています。また、淡海環境保全財団では、県下各地でボランティアが刈り取ったヨシを下物町にあるヨシ苗育成センターに集荷し、チップ化してヨシ紙や腐葉土に加工しており、ヨシの利用が保全につながることをアピールしています。

慈恩尼兼葭の墓碑が残る橘堂

滋賀県地球温暖化防止活動推進員リレートーク

今回は、地域のCO_2ネットゼロまちづくりをけん引し、持ち前の器用さで教材づくりにも挑戦して“伝わる”工夫を続けておられるこの方です。

小田　金治さん
日野町在住

２年前に滋賀県地球温暖化防止活動推進員になりました 日野町の小田金治です。

何十年に１回発生するかという自然災害が世界中で発生しているという報道が流れる中、その原因が地球の温暖化が影響していると言われています。以前は「自然災害の事だから どうしようもない」と考えていて 地球の温暖化に理解がありませんでした。地球温暖化防止活動推進員になり啓発活動や研修に参加させてもらって、私自身が少しづつ理解している状況です。

地球温暖化を止めるには 大量生産、大量消費、大量廃棄の生活から卒業する必要があります。温暖化の理解と、今から家庭でできる温暖化防止対策を多くの方に訴えたいと考えています。

ペットボトルのごみ分別について
子どもたちに伝える小田さん

地球温暖化防止活動推進員は、地球温暖化対策の推進に関する法律に基づき、知事から委嘱され、温暖化防止にかかる普及啓発を行われています。

滋賀県流域下水道「マンホールカード」20,000枚配布達成!!

淡海環境プラザで、2016年８月１日から配布している滋賀県流域下水道「マンホールカード」の配布数が2025年10月21日に20,000枚に達しました。

20,000枚目を手にされたのは、大阪府松原市から来られた松本全博、とし子さんご夫妻です。記念品として滋賀県などのマンホール缶バッジをデコレーションした記念ボード、当財団のヨシ製品、マンホールコースターを髙木理事長から贈呈しました。

まいばら親子エコステーション2025

カマキリ博士の昆虫講座

2025年9月7日(日)、米原市役所で市民の皆さんにエコビレッジ構想を知り、身近な脱炭素の実践行動につなげていただくことを目的に今年度で３回目となる「まいばら親子エコステーション2025」が開催され、当財団が企画運営しました。

開会あいさつに続き、アップサイクル衣装によるダンスパフォーマンスや、脱炭素先行地域としての米原市の取り組みを紹介するアニメーション上映も行われ、来場者を華やかに迎えました。

約420名の参加者が多数の企業・団体による環境・エコをテーマにしたブースがずらりと並ぶ会場をクイズラリー形式でめぐり、脱炭素について考えていただきました。

アストラゼネカ㈱のブース

このイベントの来場者アンケートの結果から、年々「脱炭素先行地域」に関する認知度が高まっていることが伺えました。参加者の半数が12歳以下と親子連れが多く、アンケートには「地球温暖化やエコについて学べた」「エコな行動をしようと思う」「来年も参加したい」といった声が多く寄せられました。このイベントの「脱炭素を身近に、楽しみながら学ぶ」というコンセプトが多くの来場者に届いたようです。

親子で体験しながら学ぶことで、子ども世代から大人世代まで、家庭や地域でできる“脱炭素アクション”を意識するきっかけになったのではないかと思います。

国民スポーツ大会「おもてなSHIGAひろば」に出展しました

2025年9月28日(日)、彦根市の平和堂HATOスタジアムで国民スポーツ大会の開会式が開催されました。この大会を盛り上げ、来場者の皆さんに滋賀の魅力や県内の多彩な取り組みを紹介する会場の「おもてなSHIGAひろば」において、当財団は、滋賀県CO_2ネットゼロ推進課とともに「滋賀×スポーツ×CO_2ネットゼロ」をテーマにブース出展し、多くの来場者でにぎわいました。

当ブースでは、エアロバイクをこいで発電し、風を起こす体験展示のほか、びわ湖の温暖化による影響を紹介するパネル展示を行いました。自転車競技の選手をはじめ、県内外から訪れた方々が次々と挑戦し、スポーツの盛り上がりと環境学習が一体となり活気ある雰囲気に包まれました。

また、当財団は県からの受託で、国スポ・障スポ大会にあわせて県民や事業者がCO_2削減に取り組む「CO_2ネットゼロアクション」を展開しました。

淡海ヨシボランティアを開催しました

琵琶湖のヨシ群落は、湖国らしい個性豊かな郷土の原風景であり、水鳥や魚などの棲みかであるとともに私たちの心の財産でもあります。

当財団では、2015年から琵琶湖周辺において市民によるヨシ群落保全活動としてヨシ植栽イベントを実施しています。

今年は11月３日(月)に野洲市須原で開催し、33人の方にご参加いただきました。初参加の方もベテランの方も、丁寧にヨシを植栽してくださいました。

この場所では参加者の方々の活動によって、徐々にヨシ原が拡大してきています。皆さんが心を込めて植栽したヨシ苗が元気に育ち、琵琶湖の大切な自然環境となることを願います。

おしらせ

「すすめ!!びわっこ探検隊」冬プログラムの参加者を募集します
ラムサール条約登録地の琵琶湖を取り巻く自然環境の豊かさを体感しよう!!

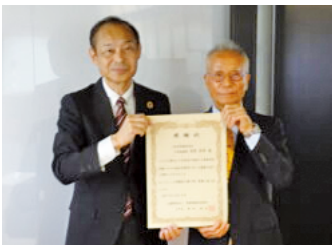
びわ湖をはじめとする滋賀県の豊かな自然環境や自然と人との共生、文化などを学び体験する「びわっこ探検隊」の冬季プログラムの参加者を募集します。

【日　　時】2026年(令和８年)１月31日(土)　9:30～12:00
【場　　所】草津市下物町　※現地集合・解散
【内　　容】ヨシ刈り体験とオオヨシキリの巣探し、湖岸で水鳥観察会
※雨天の場合は屋内プログラムに変更
【講　　師】日本野鳥の会滋賀
【対　　象】滋賀県内在住の小学４年生～中学２年生
【定　　員】15名程度
【参 加 料】500円(保険料、消耗品等の実費)
【申込締切】**2026年(令和８年)１月23日(金)17:00**
【申 込 先】公益財団法人 淡海環境保全財団
【申込方法】メール、電話、FAX（下記財団連絡先)詳細は財団のホームページをご覧ください。

「世界湖沼の日」制定記念・MLGs巨大タペストリーが設置されました

淡海環境プラザでは、MLGs推進委員会が、昨年12月に国連総会で制定された「世界湖沼の日：8月27日」を記念して開催されたタペストリー制作ワークショップの作品を展示しています。一人ひとりの手形と想いが重なり合い、ひとつの大きな作品となって来館者を迎えています。

ご寄附をいただきました(三和産業株式会社様)



三和産業株式会社様は、社会の安全安心を守るコンクリート製品を製造されている湖南市にある企業です。また、自然環境や生物多様性の保全にも熱心に取り組まれています。こうしたことから、当財団の活動にも深くご理解をいただき、毎年寄附をいただいています。

過日、当財団理事長髙木浩文から同社代表取締役の桒名宏幸様に感謝状を贈り、お礼を申し上げました。

編集後記

2025年は夏がとても長く続き、秋らしい時間をほとんど味わえないままに伊吹山に冠雪の便りが届きました。そのような中でも、日々の活動や出会いの一つひとつに支えられながら、たくさんの方とともに環境のことを考える機会に恵まれました。ご協力いただいた皆さまに、あらためて心より感謝申し上げます。新年も、皆さまと一緒によりよい活動ができれば幸いです。

あすの淡海 VOL.52 | 2026 冬号（年4回発行）

発行
公益財団法人
淡海環境保全財団
〒525-0066 滋賀県草津市矢橋町字帰帆2108番地
TEL：077-569-5301
FAX：077-569-5304
E-mail：info@ohmi.or.jp

滋賀県地球温暖化防止活動推進センター
TEL：077-569-5301　FAX：077-569-5304
E-mail：ondanka@ohmi.or.jp

淡海環境プラザ
TEL：077-569-5306　FAX：077-569-5334
E-mail：plaza@ohmi.or.jp

ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C017322
Environmentally Ink (Vegetable oil Non VOC)
Waterless Printing. Naturally.

●用紙：責任ある木質資源や再生資源を使用したFSC®認証用紙
●インキ：環境配慮型インキ（植物油インキ or ノンVOCインキ）
●印刷：有害な廃液を排出しない水なし印刷

読者アンケート

今後のより良い情報発信のため、アンケートへのご協力をお願いします。ご回答いただいた方には、財団のヨシ製品セット(2,000円相当)をお贈りします。